

【使徒書日課】使徒言行録 13章44～52節

⁴⁴次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞こうとして集まって来た。⁴⁵しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたま、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。⁴⁶そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。⁴⁷主はわたしたちにこう命じておられるからです。

『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、
あなたが、地の果てにまでも
救いをもたらすために。』」

⁴⁸異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。⁴⁹こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。⁵⁰ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出した。⁵¹それで、二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。⁵²他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

【福音書日課】マルコによる福音書 12章1～12節

¹イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。²収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。³だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。⁴そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。⁵更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。⁶まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。⁷農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』⁸そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。⁹さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。¹⁰聖書にこう書いてあるのを讀んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。』

¹¹これは、主がなさったことで、
わたしたちの目には不思議に見える。』」

¹²彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

神のぶどう園【こども説教のために】

『こどもさんびか（改訂版）』に「主イエスはまことのぶどうの木」という讚美歌があります。主イエスが弟子たちと共に過ごされた最後の晩にお語りくださった、「わたしはまことのぶどうの木…」(ヨハネ 15:1 以下) という教えを歌にした讚美歌です。わたしが以前いた教会では、付属幼稚園で盛んに歌っていました。年長組が「ぶどう組」で、幼稚園に入った子どもたちは皆、「ぶどう組」のお兄さんお姉さんになることを目標に、この讚美歌を歌いながら毎日の生活を過ごすのです。

日本ではブドウの収穫は、ちょうど今頃の季節です。収穫に良い時期は限られていますから、暑い中、大勢の人の手で一斉に収穫作業をするようです。もちろん、収穫の時期だけでなく、ブドウの木の世話は長い期間続きます。良い実を結ばせようとすれば、多くの手間がかかるのです。そのようなブドウ栽培を、人間は 5000 年も前からしてきたと言われます。

主イエスは、人間の生きる世界を神がお造りくださった「**ぶどう園**」にたとえて教えられました。『(旧約) 聖書』にも、そのようなたとえがありますから、主イエスはそれをご存じだったのでしょう。

「ぶどう園」を始めるのは、大変なことです。土地をブドウ栽培に適した土に耕して苗を植えるだけでは足りません。悪い者に盗まれたりしないように垣を巡らし、見張り場を設ける必要があります。収穫した実りは搾ってぶどう酒にしますから、搾り場も必要です。これだけの準備をしてようやく、実を結ばせるための世話が始まるのです。

その「ぶどう園」を、神は**農夫たちに貸して旅に出て**しまわれる、と主イエスは、たとえでお語りになります。事実上、農夫たちに「ぶどう園」を与えてしまったのです。ただ神が願われたのは、その「ぶどう園」で得られた収穫を受け取ることです。農夫たちが独り占めしてしまわないことです。

その神の願いを農夫たちに伝えるために、「**僕**」が送られ、また「**愛する息子**」が送られました。それは、主イエスであり、わたしたちです。「神のぶどう園」である世界に、わたしたちは、主イエスと共に送り出されるのです。

迎え入れる

8月には、子どもたちと共に「平和の祈り」と「平和の挨拶」を続けています。毎週の主日礼拝を子どもたちとの合同で執り行うようになってから、毎年、この取り組みをしています。すでに何年も重ねていますから、多くの方は自然に振舞ってくださっているようです。

もっとも、初めの頃は戸惑われる方も少なくありませんでした。「平和の祈り」は決まった祈祷文を唱和するだけですから戸惑うことはありませんが、「平和の挨拶」は前後左右に顔を向けて互いに挨拶を交し合うというものですから、戸惑うのも無理はありません。というのも、礼拝を自分と神との関係だけで考えるならば、礼拝中に他の人に関心を向けるというのは、どこか後ろめたい思いにさせられるからです。

確かに、わたしたちは、礼拝で神との関係を正そうとしています。一週間の生活の中で、わたしたちは、常に神との関係を最優先にできているわけではありません。もしかすると、ほとんど後回しになっていて、気づいたら月曜日から土曜日まで、『聖書』を開くことはおろか、短く祈ることさえせずに過ごしてしまうということが、無いとは言えない。それでも、神は憐れみ深いお方で、週に一度、御前へと呼び集めてくださるので、わたしたちは、かろうじて日曜日の朝の礼拝に加わらせていただいています。一人自宅で個人礼拝をすればよいと考える人もいますが、実際には、日常生活にすべてが手の届くところにある自宅では気が散ってしまい、祈ることにも『聖書』を読むことにも集中できないものです。けれども、決められた時間に行われる共同の礼拝へと導かれ、そこで、自分の好みや流儀ではなく、教会の定めた形で祈りに加わり、『聖書』の朗読を聴き、讃美を歌うことで、わたしたちは、神と向き合う姿勢を正していただくことができるのです。

これは、よく言われることですが、わたしたちの信仰における縦軸の関係です。神と自分という上下の縦軸で表されるような関係を正すために、礼拝に加えられています。けれども、わたしたちが礼拝に加えられるのは、上下の縦軸の関係が正されるためだけではありません。左右の横軸の関係も正されるために、わたしたちは礼拝に加えられているのです。人と人との互いの関係です。キリスト者の信仰で、この縦軸の関係と横軸の関係は、不可分のものです。「平和の挨拶」は、神との関係という縦軸を正された者が、互いの関係という横軸も正される者であることを表すために、初期の教会以来、行われてきたことなのです。

学校の紹介で来会する中高生の多いこの季節に「平和の挨拶」を交すことは、教会にとって意味深いことでしょう。見知らぬ客人を迎え入れ、神が遣わしてくださった一人の人として受け入れる証しに、挨拶を交わすのです。

「農夫」として

主イエスがお語りくださったたとえ話で、「農夫たち」は、農園主のもとから遣わされてきた「僕」たちや「息子」を迎え入れようとしない、と語られていました。ここで描かれる「農夫たち」は、収穫を自分たちだけで独り占めしようとする強欲な者たちを示唆しているのでしょうか。

たしかに、このとき主イエスは、ある特定の人々に向かって、このたとえ話を話されていました。主イエスの活動を快く思わず、封じようと考えていた者たち、「祭司長、律法学者、長老たち」(マルコ 11:27)といったユダヤ社会の支配層の者たちです。彼らは確かに、この地方のユダヤ社会で権威や権力、また富を独占していました。そのような者たちが、主イエスを問いただしていたのです、「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか」(同 11:28)と。論争を吹っ掛けられた主イエスが、最後にお語りになられたのが、このたとえ話でした。

農園主からぶどう園を貸し与えられ、完全に自分たちで管理することを許された「農夫たち」が、「僕」らを拒み、農園主の「息子」を殺したならば、農園主はどうするだろうか。「**農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人たちに与えるにちがいない**」と主イエスがお語りになられたのを聞いて、彼らは、それが自分たちへの当てつけだと考えたと言います。けれども、わたしたちは、主イエスが彼ら祭司長、律法学者、長老たちを裁いて、神の罰を受けるに違いないと告げられたのだと、簡単に納得してよいのでしょうか。

このたとえ話は、確かに、神から遣わされた者を拒み、その愛する一人息子を拒んだ人間の行く末を描いているようです。しかし、主イエスが十字架で死なれた後、彼らは裁かれ、殺されたのでしょうか。もちろん、人はいずれ死にます。そうだとすると、わたしたちが主イエスの十字架死によって示されたと教えられているのは、彼らが滅びることではありません。彼らも救われることです。彼らの罪さえも赦され、新しく生きるようにされる道が拓かれているのだ、という福音です。

このたとえの「農夫たち」は、わたしたち自身でもあるのです。彼らは確かに強欲だったのかもしれませんが、わたしたちも強欲なのです。彼らは「神のぶどう園」を「自分のぶどう園」にしてしまおうとしたかもしれませんが、わたしたちも「神のもの」を「自分のもの」にしてしまう過ちを繰り返しているのです。日々の生活の中でも、教会の営みの中でも、わたしたちは、恵みによって与えられたにすぎないものを「自分のもの」として確保しようと躍起になり、遣わされてきた他の者を拒むことがあるのです。

それでも、わたしたちは、すでに赦されています。赦されて、ここに、今も居させていただいています、神の御前で互いに実りを分け合うために。